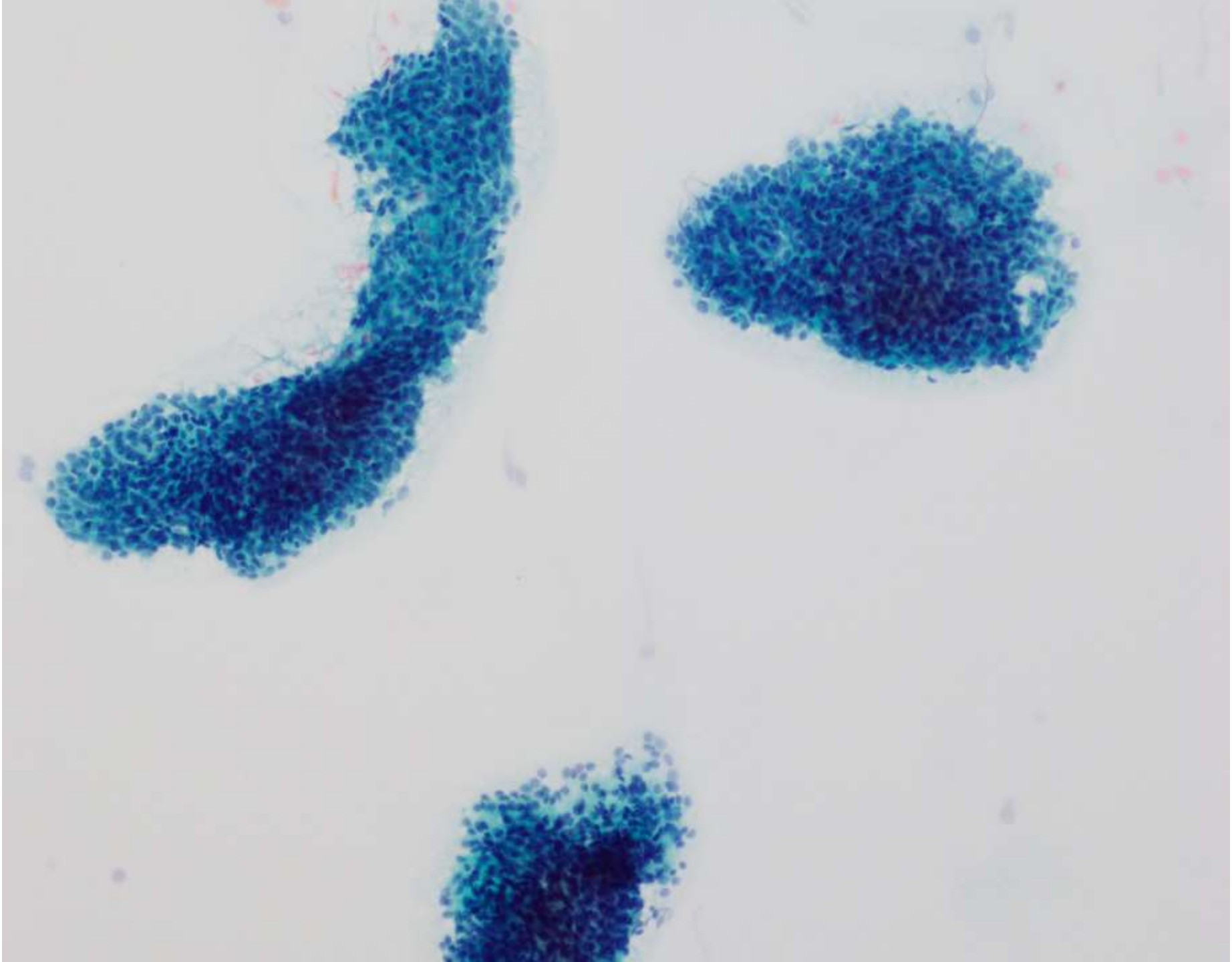
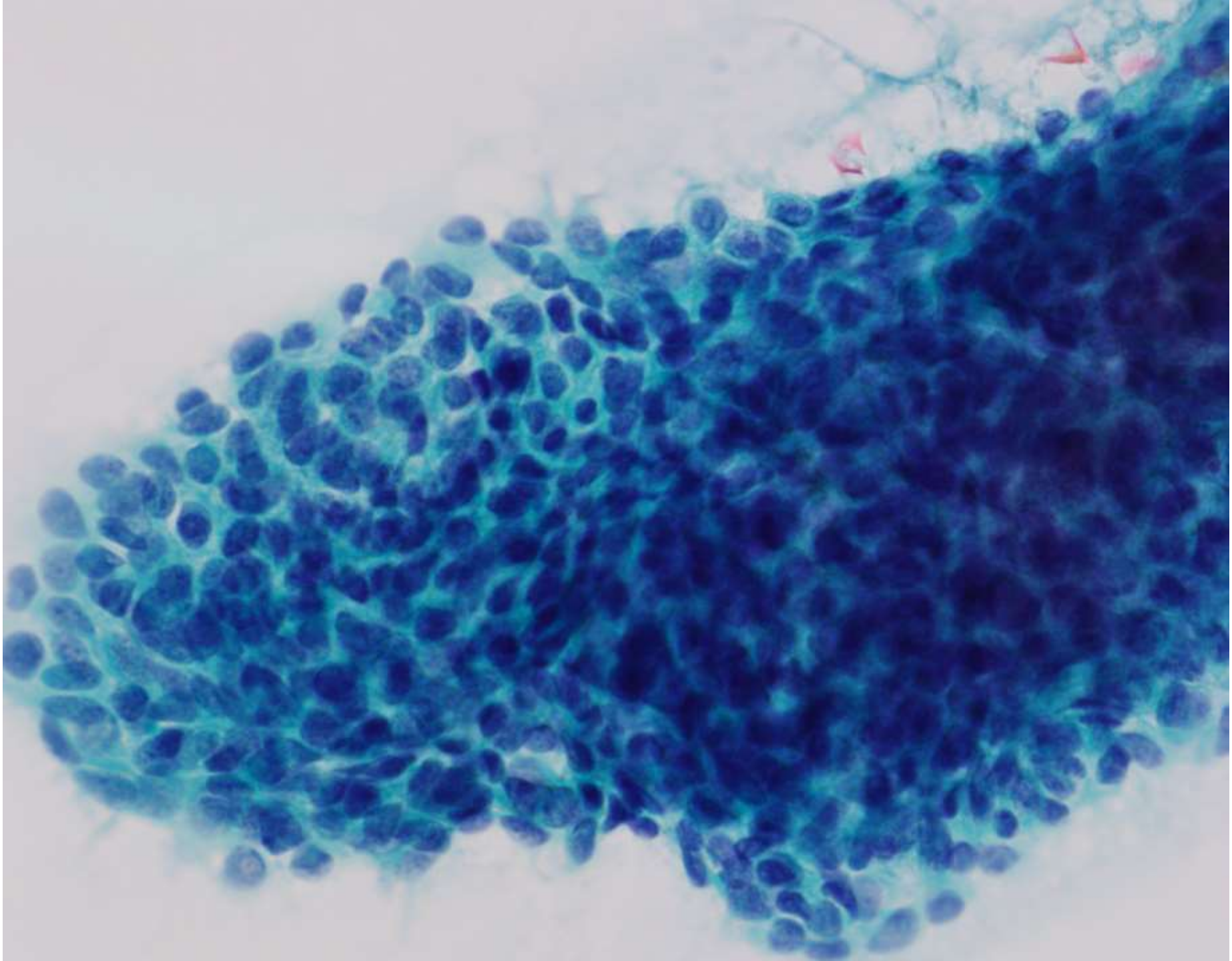
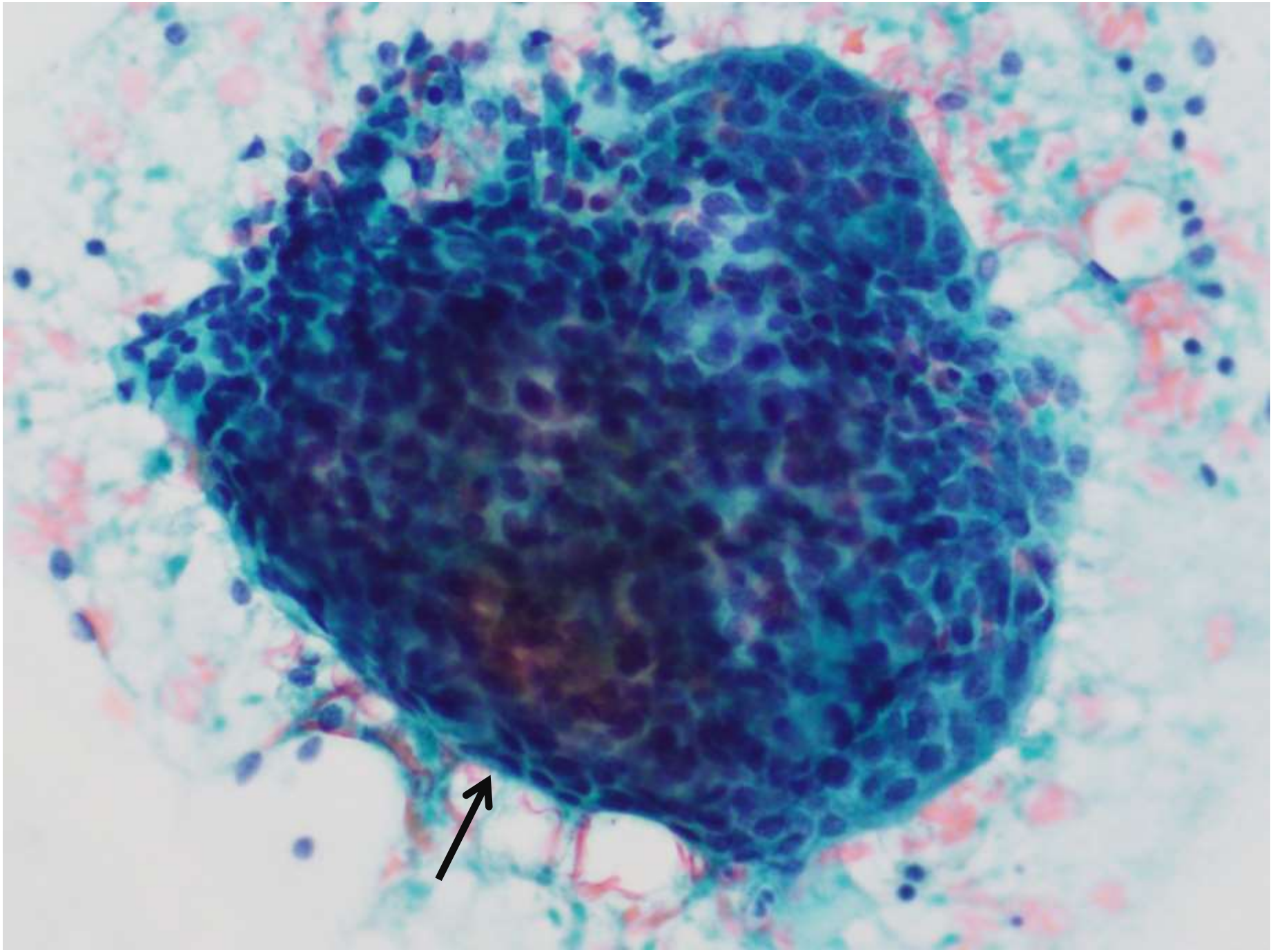
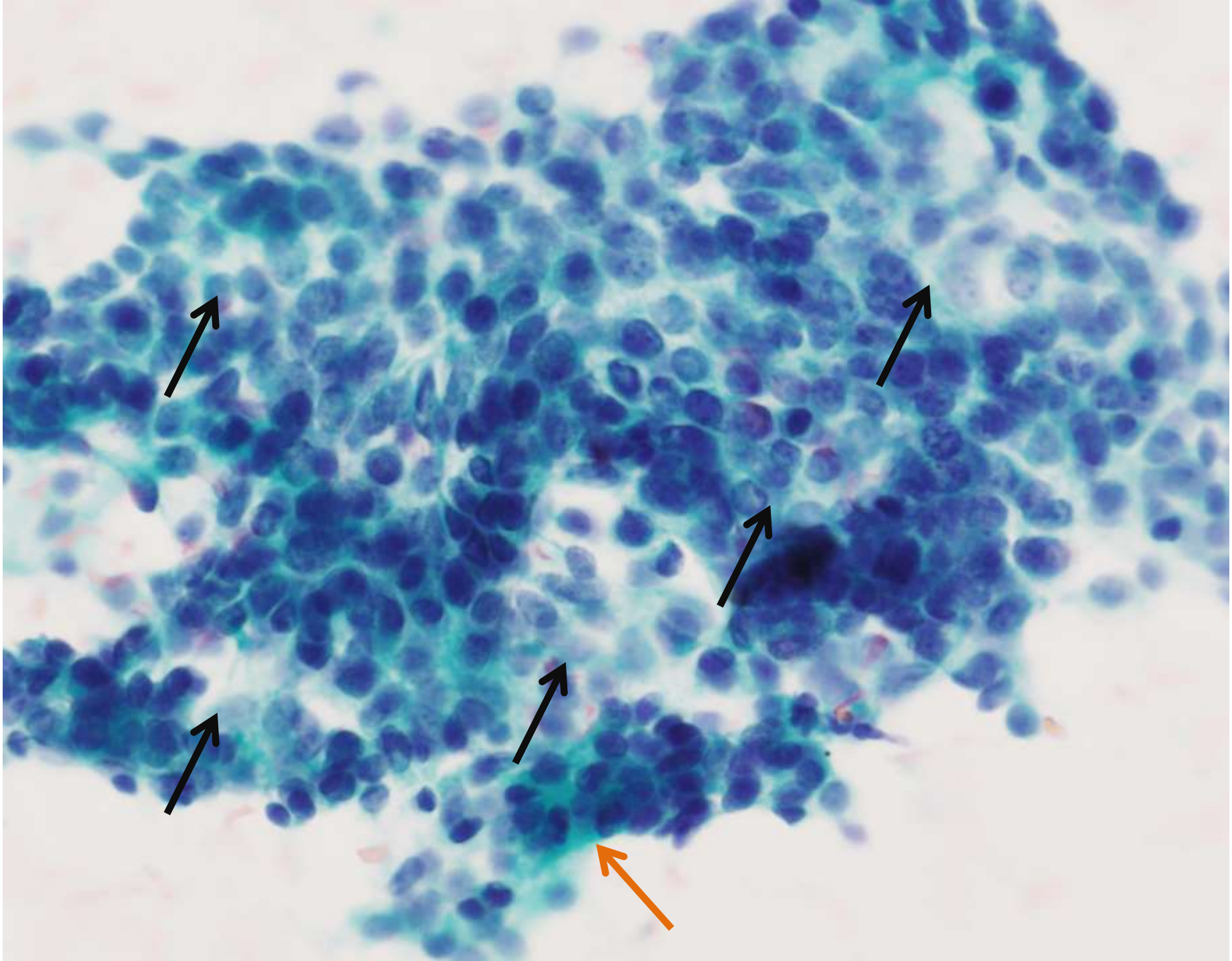
症例２

- 患者：５０歳代、女性
- 現病歴：２０１５年に左乳癌、右乳腺腫瘤で両側乳房切除後、ホルモン療法中。同年に左上顎歯肉癌で重粒子線治療。２０１７年に両側肺に結節を指摘。今回、頚部リンパ節腫大を認め、穿刺吸引細胞診を行った。
- 検体：左頚部リンパ節穿刺



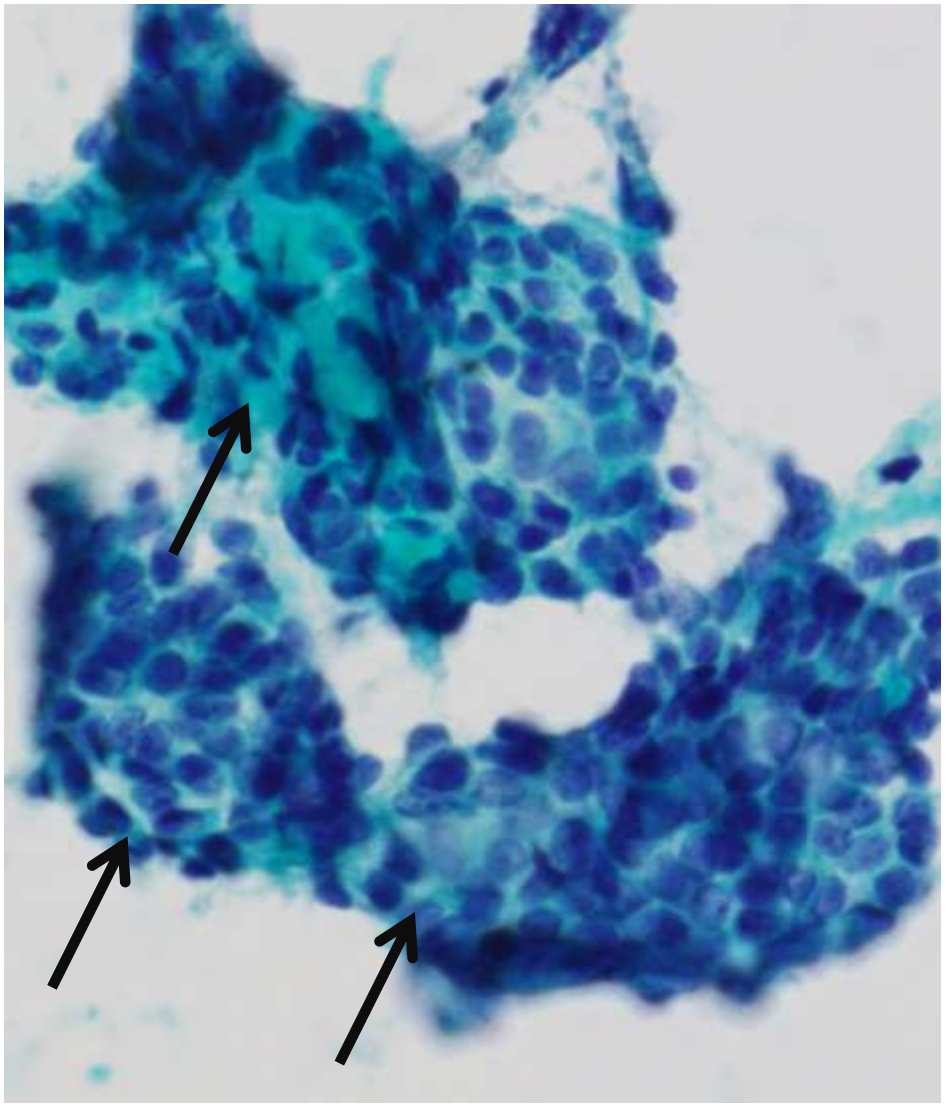


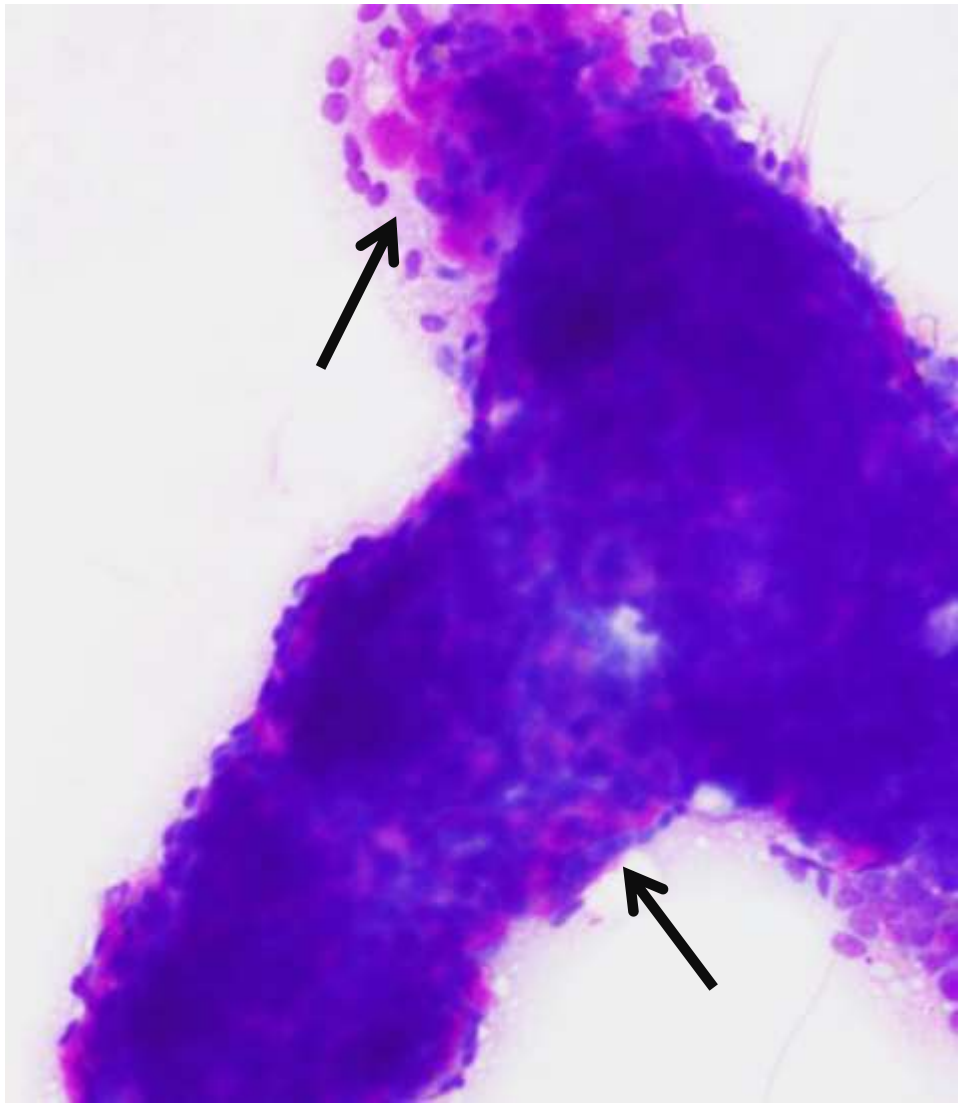




解答

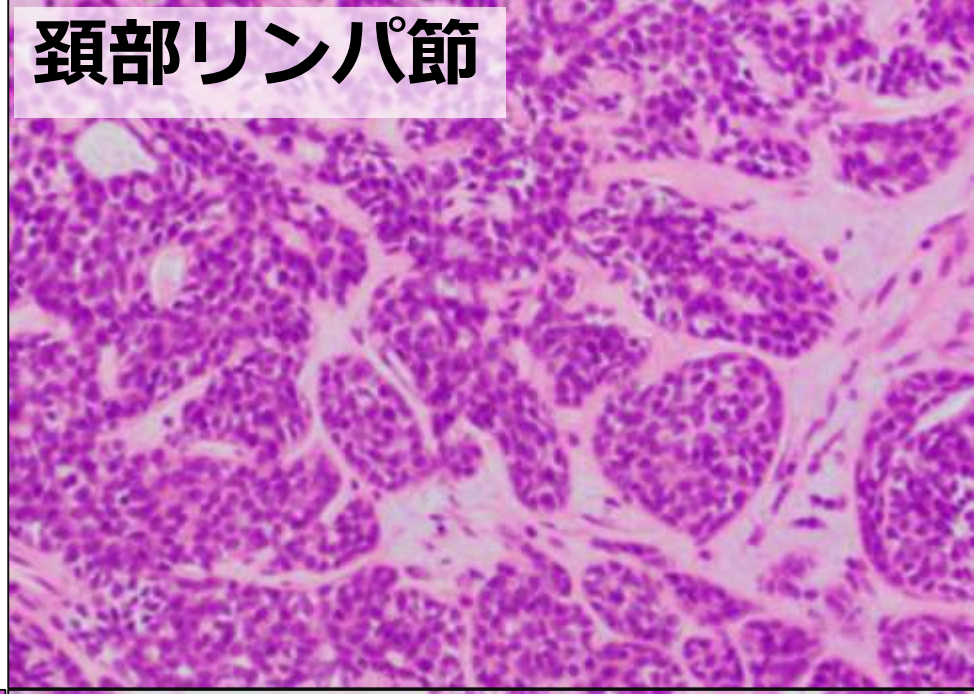
① 結核性リンパ節炎
② 乳管癌の転移
③ 扁平上皮癌の転移
④ 神経内分泌癌の転移
⑤ 濾胞癌の転移
⑥ 腺様嚢胞癌の転移
⑦ 悪性リンパ腫

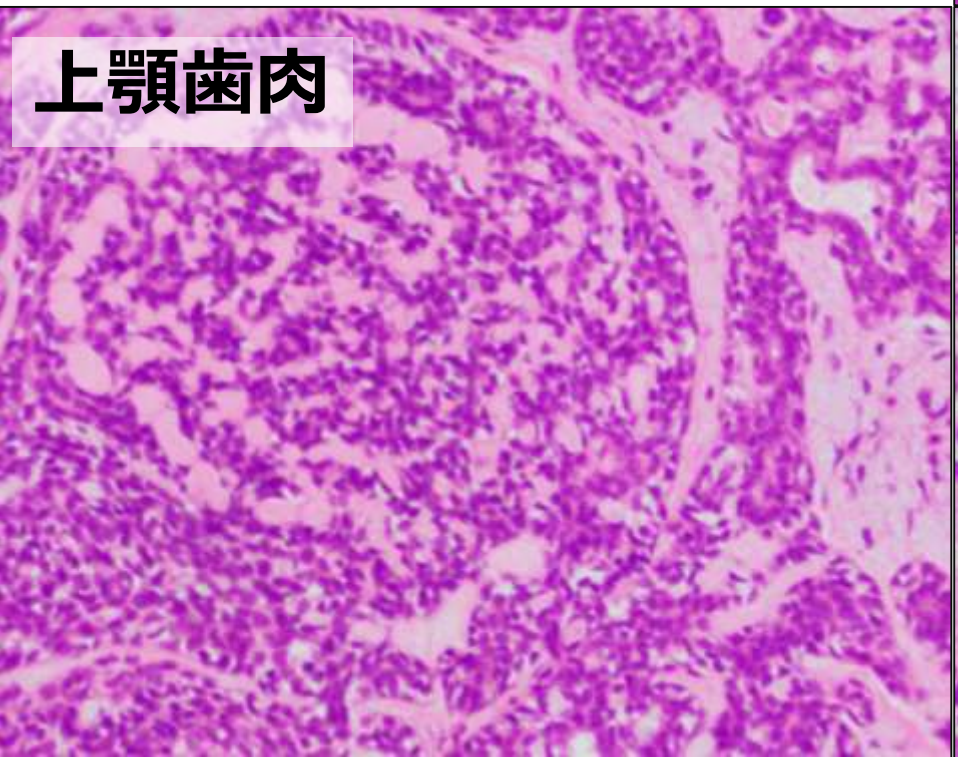


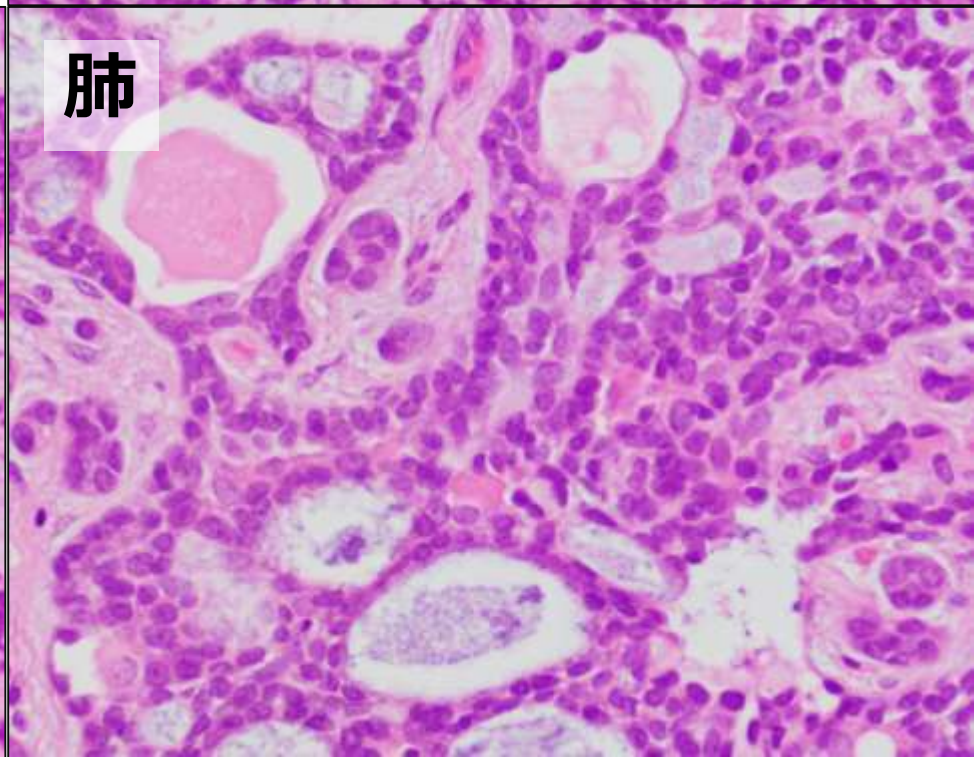


【組織診断】

Adenoid cystic carcinoma



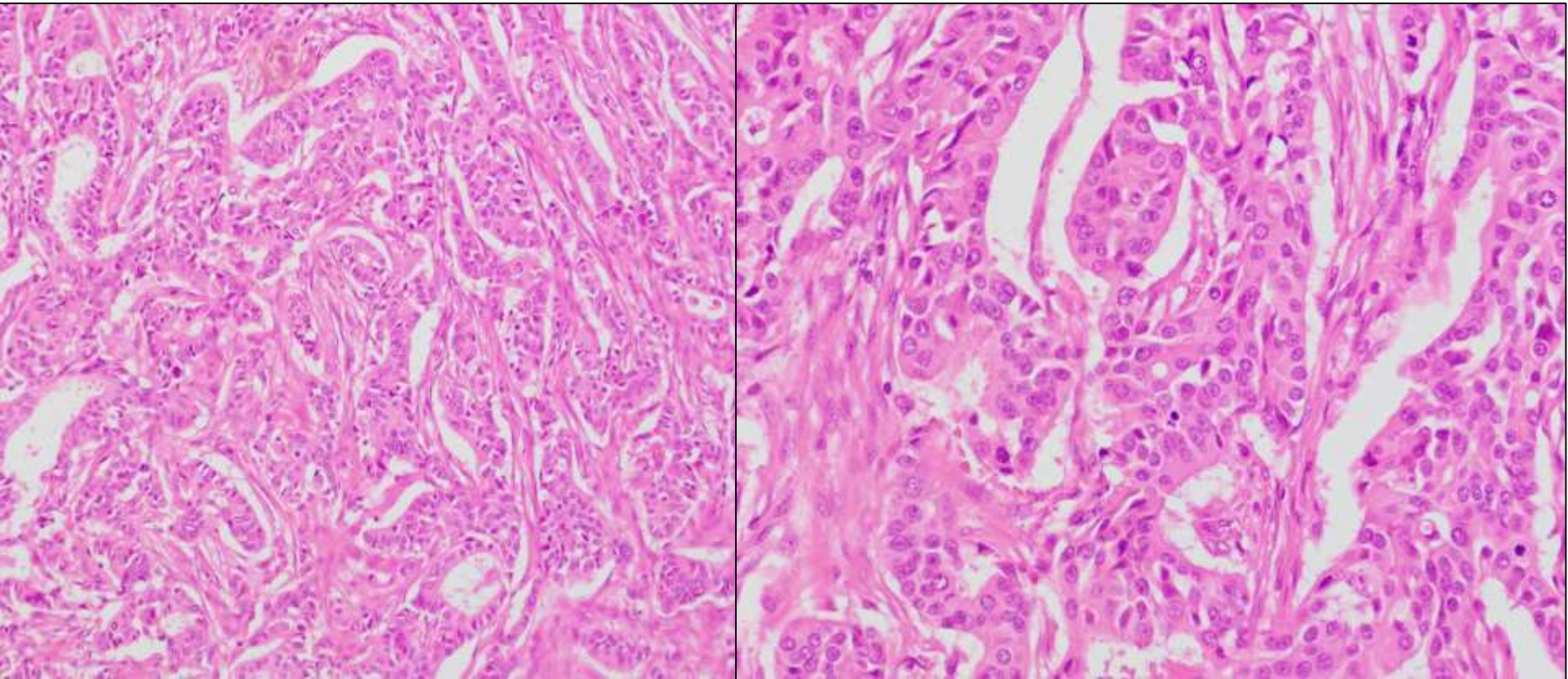




左乳腺の組織像

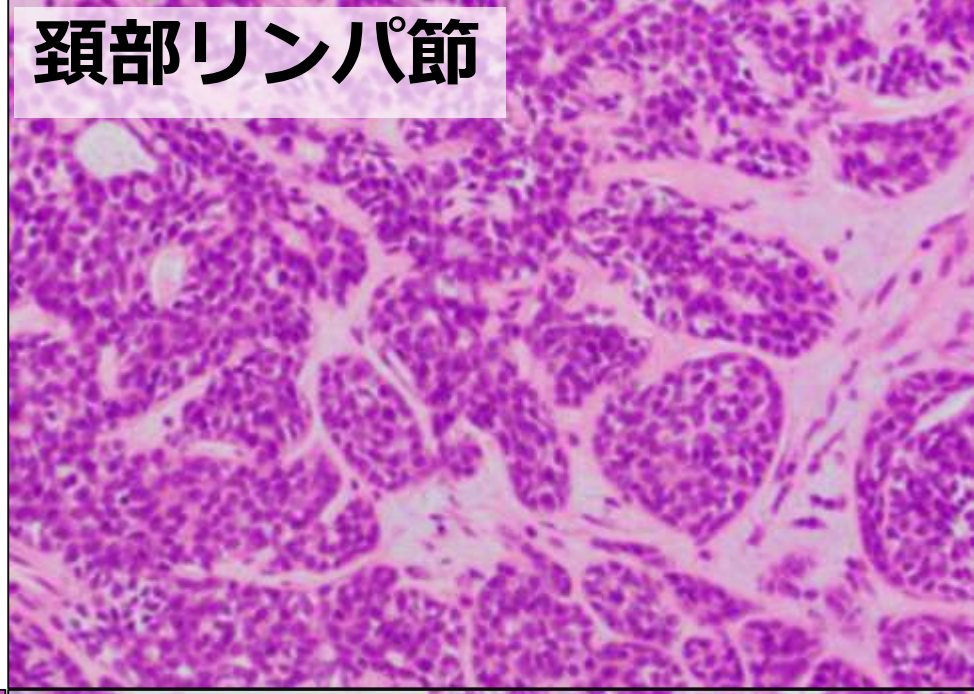
【組織診断】

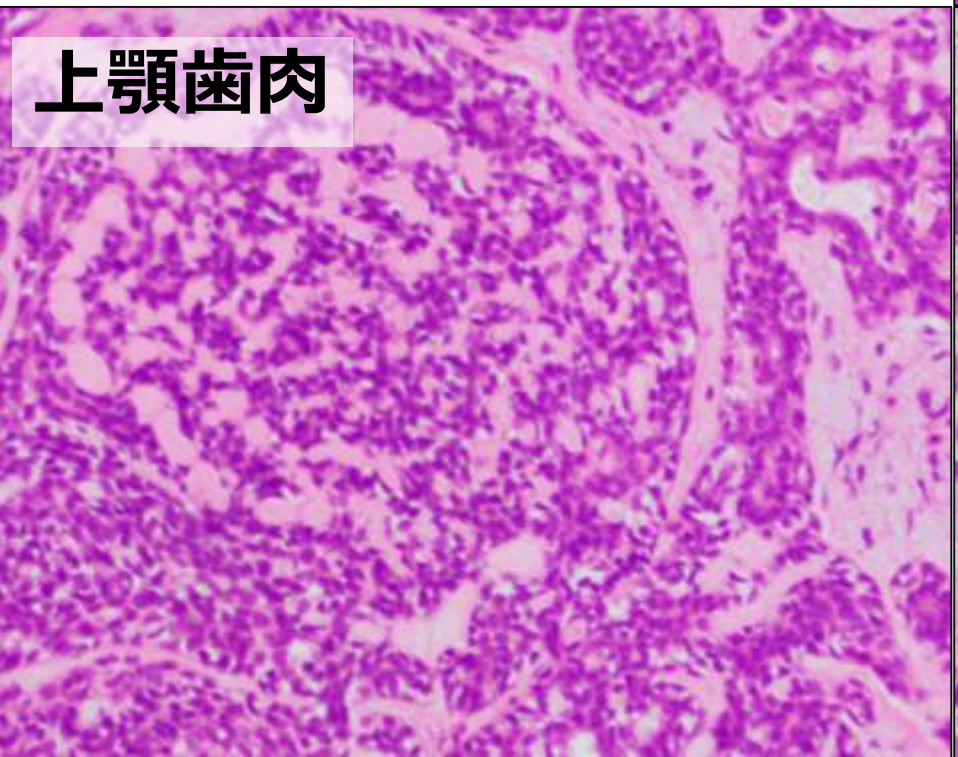
Papillotubular carcinoma

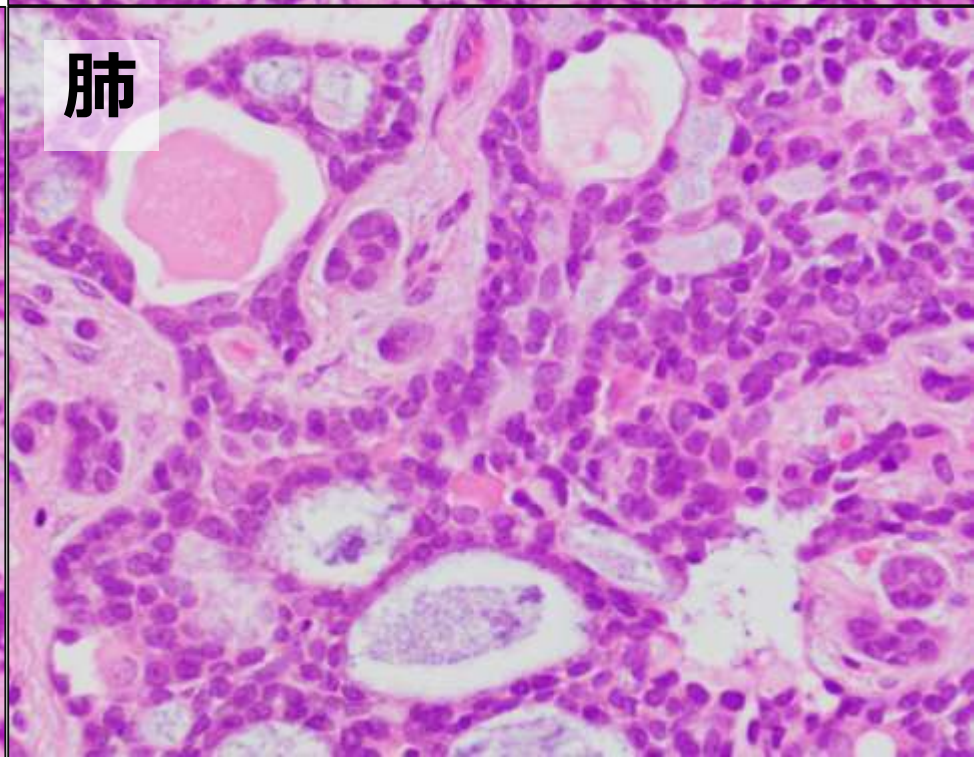


【組織診断】

Adenoid cystic carcinoma







腺様嚢胞癌

- 好発年齢：４０～６０歳
- 主に顎下腺、耳下腺、小唾液腺（特に口蓋）等に発生するが、稀に肺、乳腺、子宮頸部、食道等にも発生することがある。
- 転移はリンパ行性よりも血行性が多く、肺や骨への転移を示す。
- 発育は比較的緩慢だが、神経浸潤を呈することが多いため、痛みを伴うことがある。

腺様嚢胞癌

胞巣の形態から３パターンに区別される

- 篩状型：導管上皮細胞と腫瘍性筋上皮細胞が二相性を呈して出現し、大小不同の硝子様物質がみられる。
- 管状型：導管上皮細胞と腫瘍性筋上皮細胞が二相性を呈して出現するが硝子様物質の出現は少ない。
- 充実型：腺管や篩状構造は目立たず、重積をともなう腫瘍細胞が単調な集塊で出現する。

※近年では低分化癌あるいは未分化癌等の高悪性度成分を伴った脱分化型も認識されている。

腺様嚢胞癌

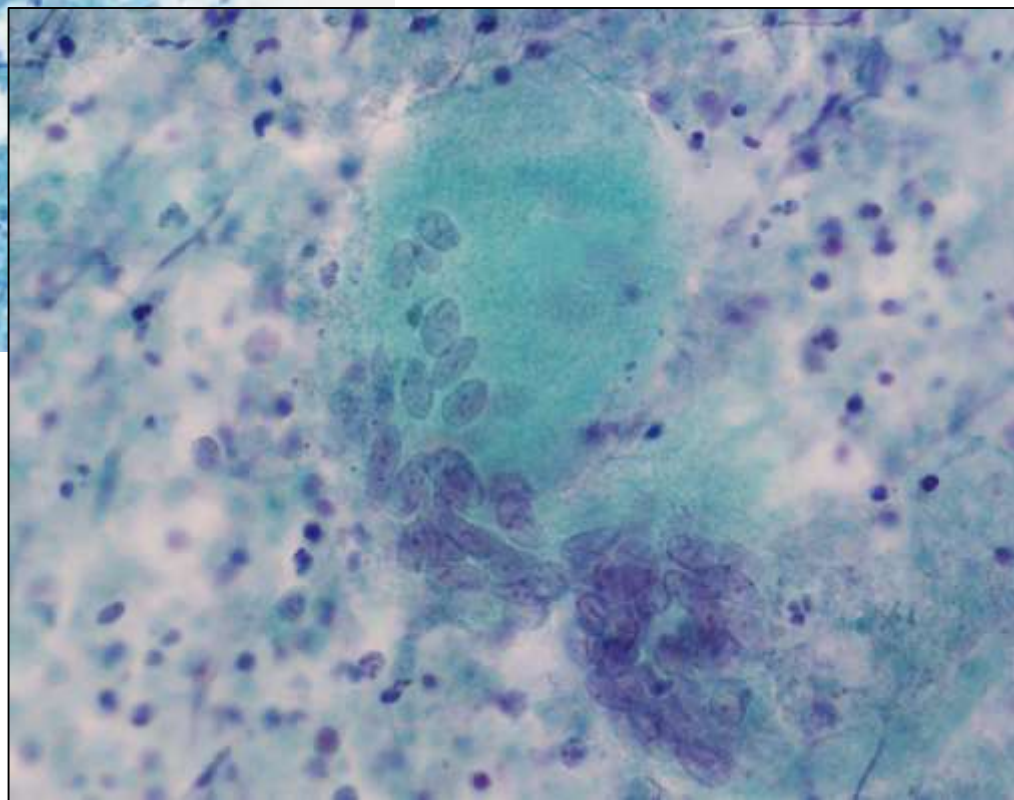
〈細胞所見〉

- 出現パターン：篩状、管状、球状、シート状集塊
- 細胞質：乏しく、ライトグリーン淡染
- 核：小型で円形～類円形、大小不同や核異型は少ない
- クロマチン：濃縮状あるいは細顆粒状
- 核小体：比較的目立たない
- その他：細胞集塊に球状の粘液様物質、
  ライトグリーン好性の基底膜様物質
  （球状、分岐状、膜状）

解答

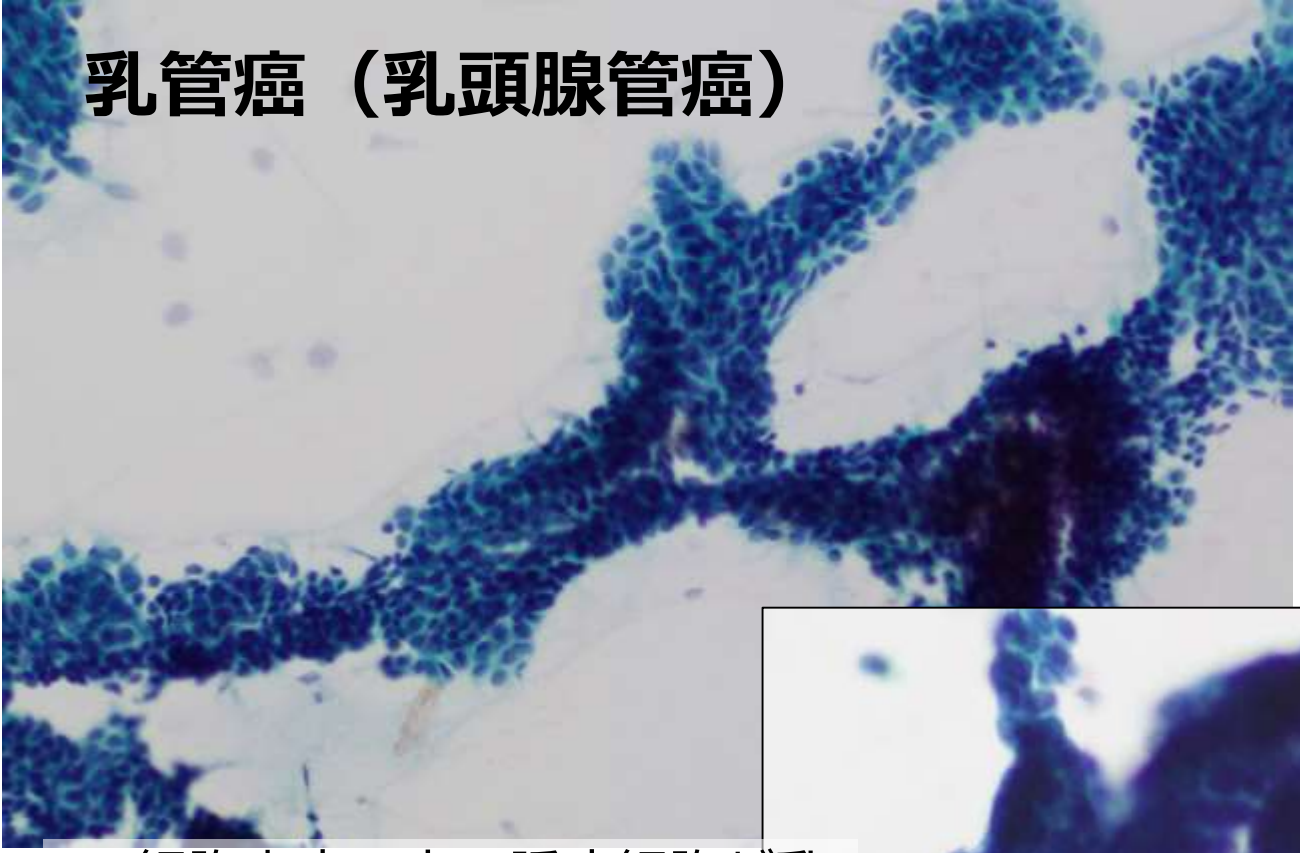
① 結核性リンパ節炎
② 乳管癌の転移
③ 扁平上皮癌の転移
④ 神経内分泌癌の転移
⑤ 濾胞癌の転移
⑥ 腺様嚢胞癌の転移
⑦ 悪性リンパ腫

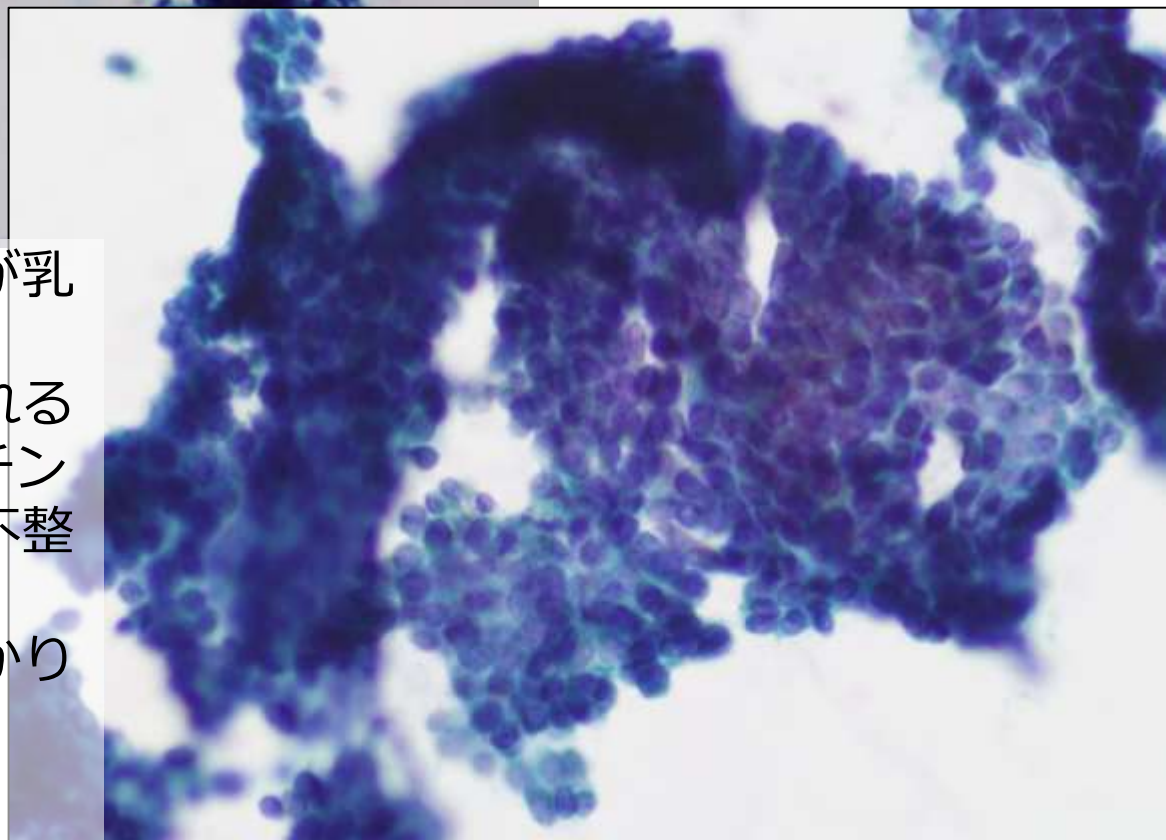
結核性リンパ節炎



- 壊死性背景、小型リンパ球主体
- 類上皮細胞
- ラングハンス型巨細胞

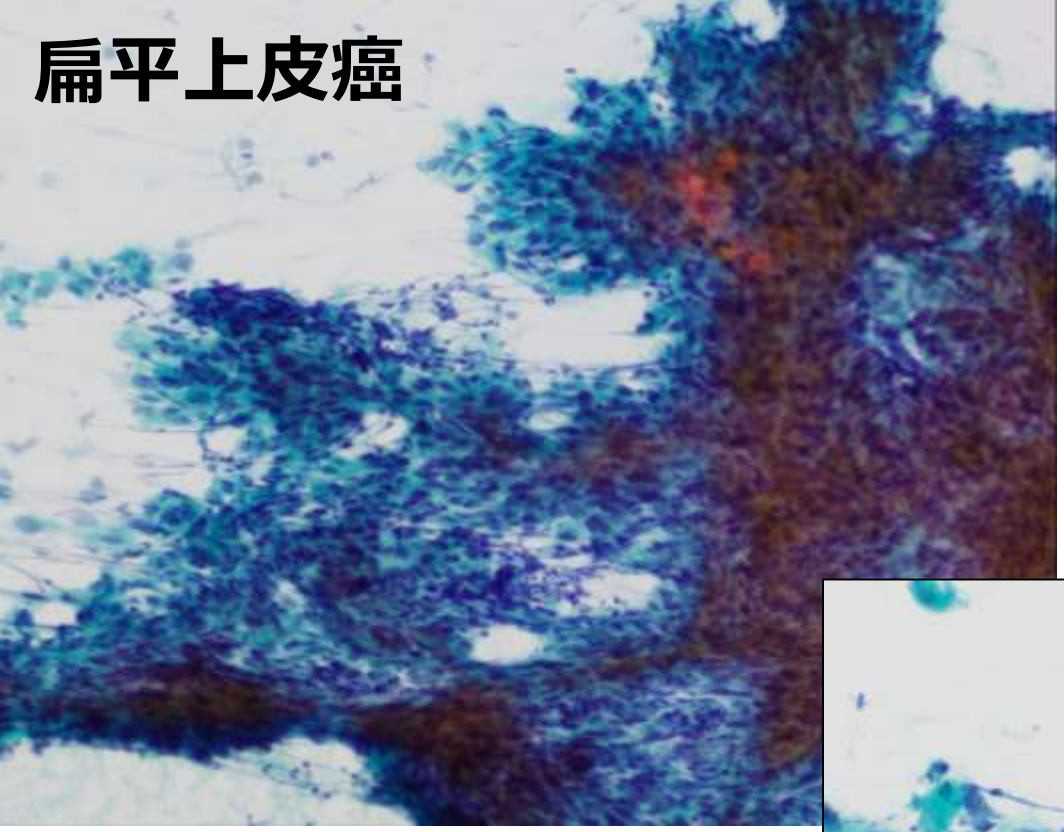
乳管癌（乳頭腺管癌）

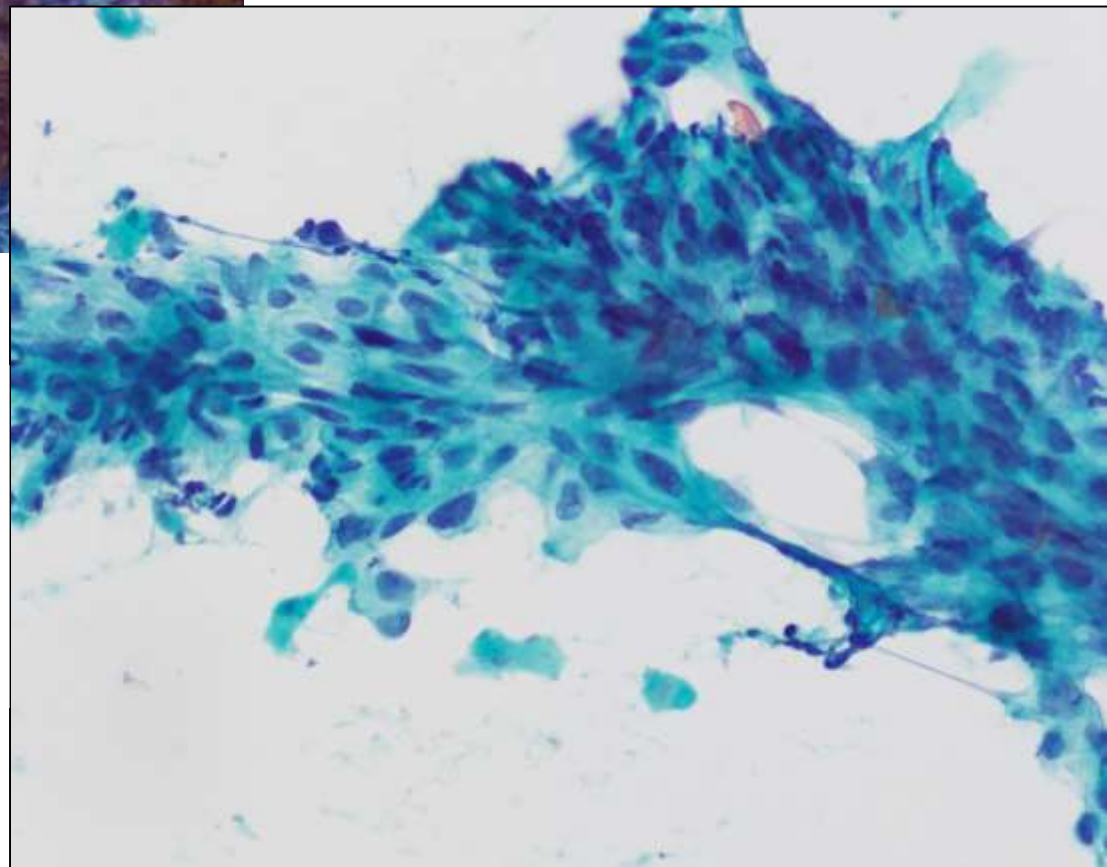




- 細胞密度の高い腫瘍細胞が乳頭状～シート状に出現
- 一部に腺腔様配列がみられる
- N/C比が高く、核クロマチンは細顆粒状で増量、核形不整を伴う
- 細胞質は比較的厚くしっかりしている
- 筋上皮細胞は認めない

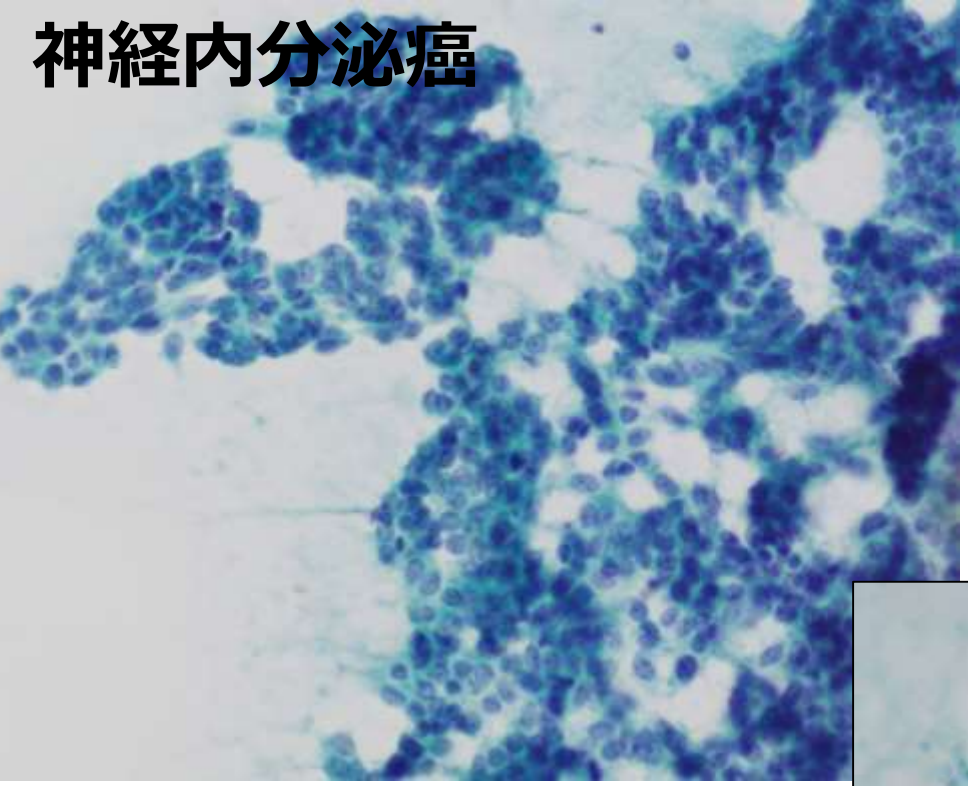
扁平上皮癌

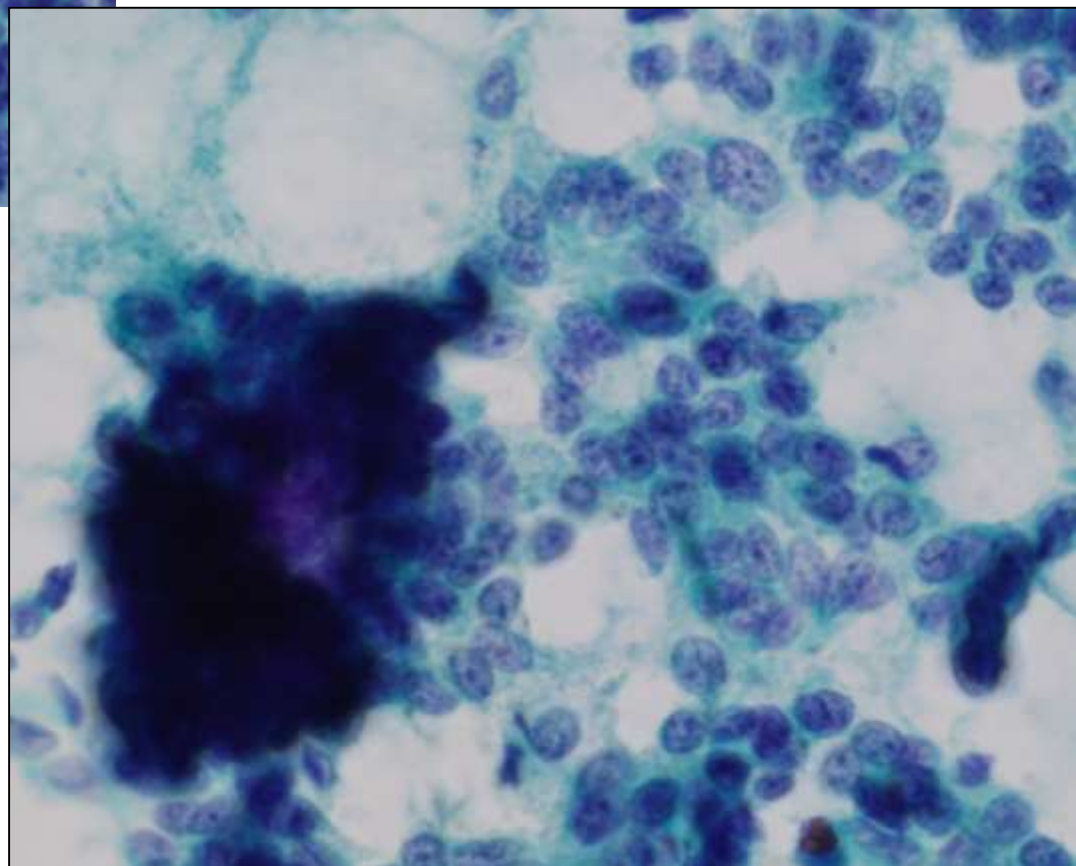




- シート状で流れを有する配列
- 核異型が強く、粗顆粒状の核クロマチンの増量や核小体を伴う
- 腺腔や粘液は認めない

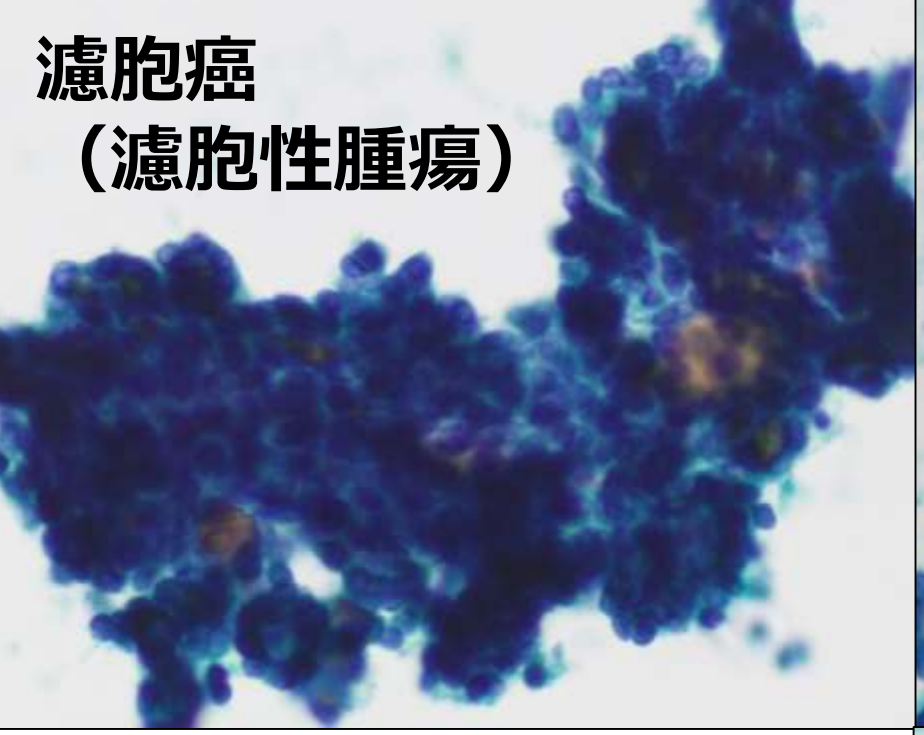
神経内分泌癌

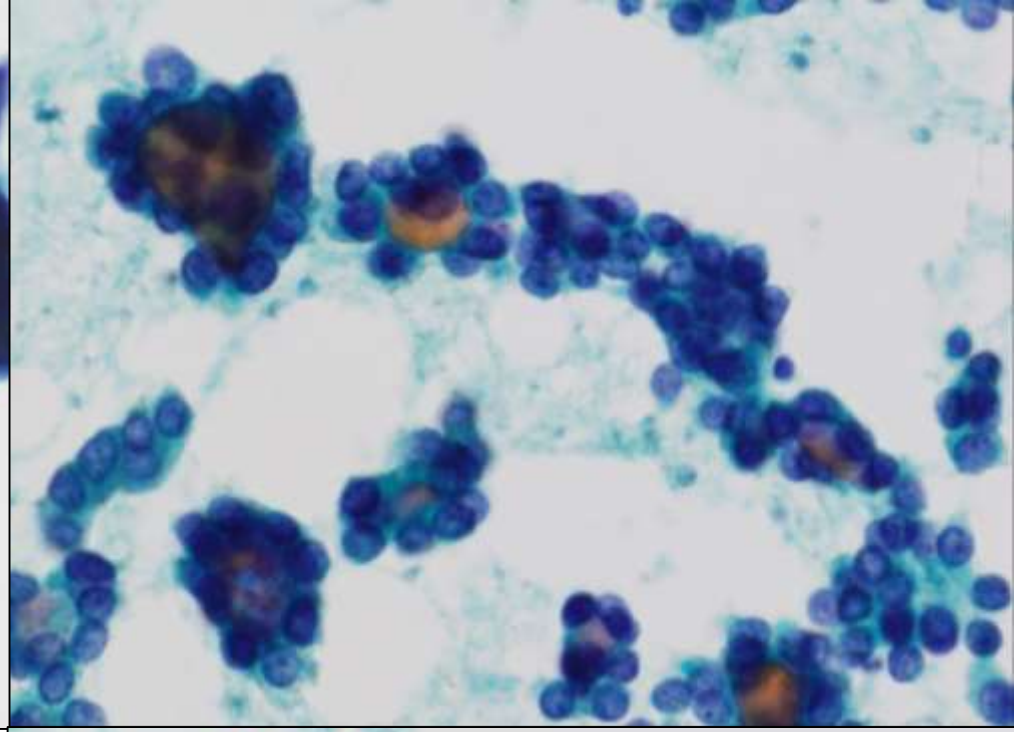




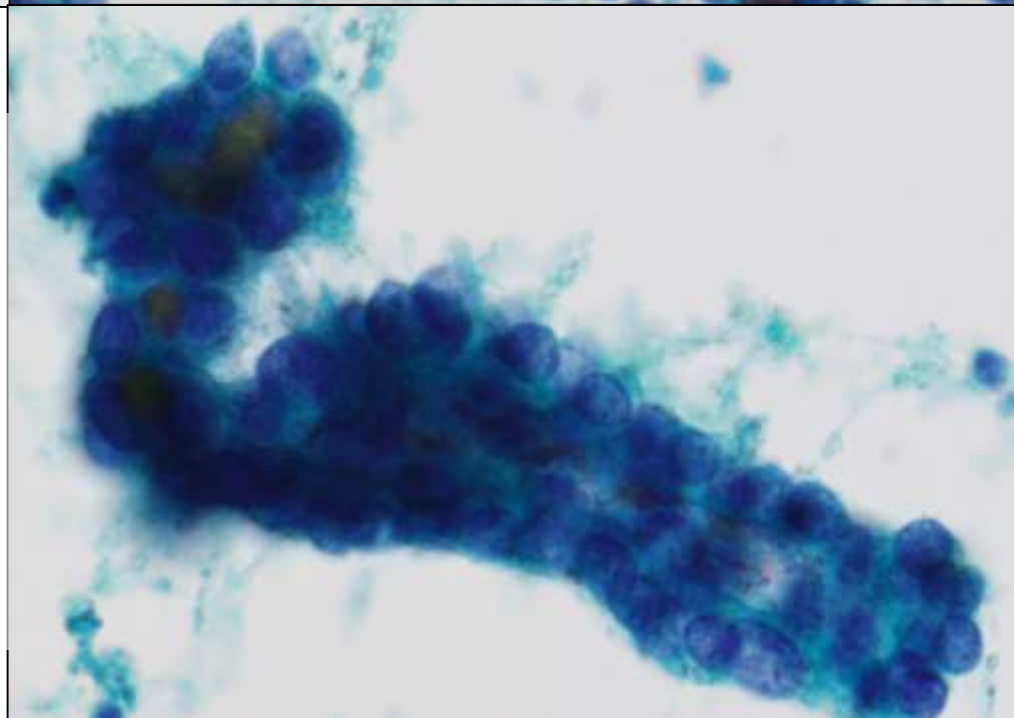
- シート状～索状配列
- 一部にロゼット構造
- 円形～類円形核
- 細顆粒状～粗顆粒状核クロマチン
- 核分裂像

濾胞癌
（濾胞性腫瘍）

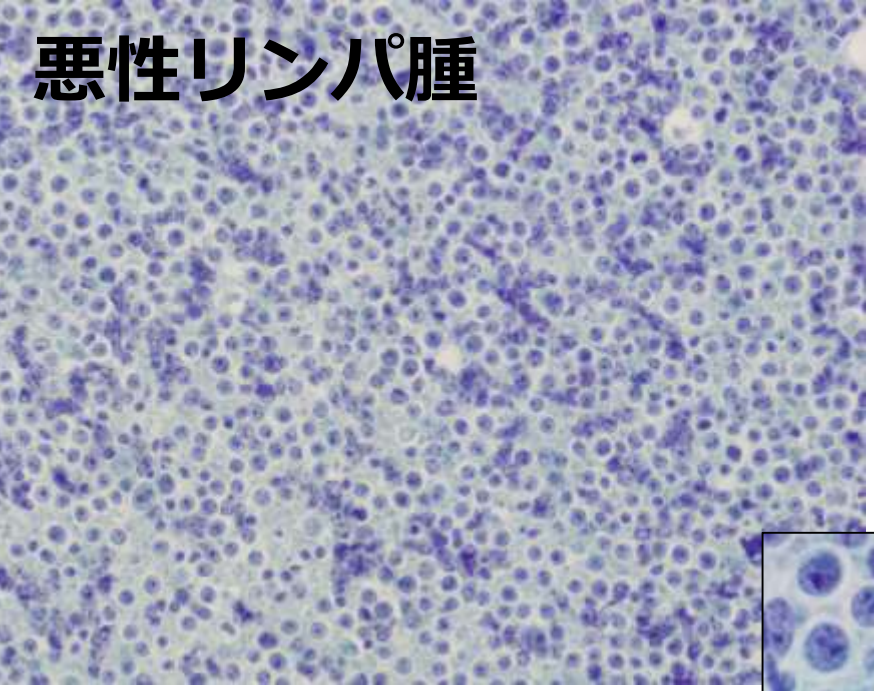


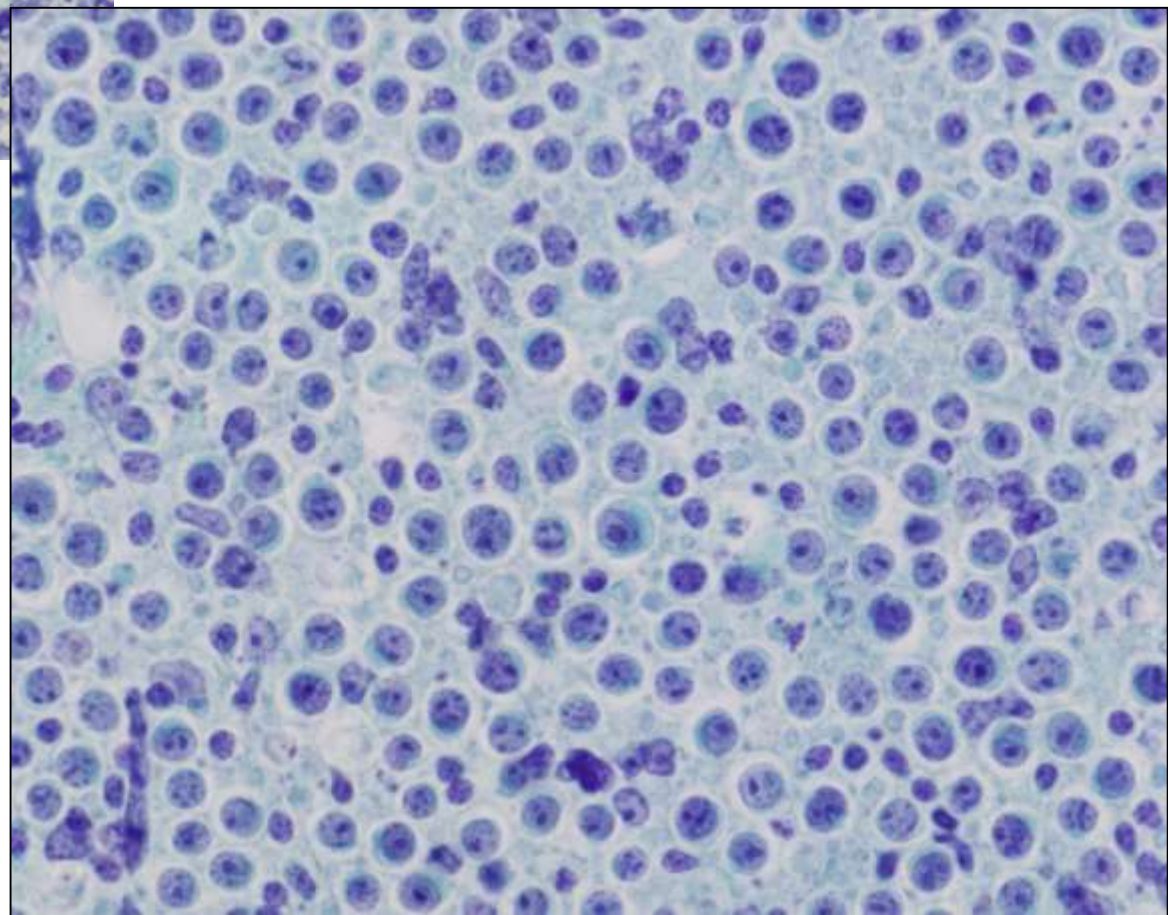


- 類円形核の腫瘍細胞が小濾胞状に多数出現
- 立体的な小濾胞状集塊
- 濾胞内にオレンジG好性のコロイドがみられる
- 過染性の核クロマチン
- 索状配列



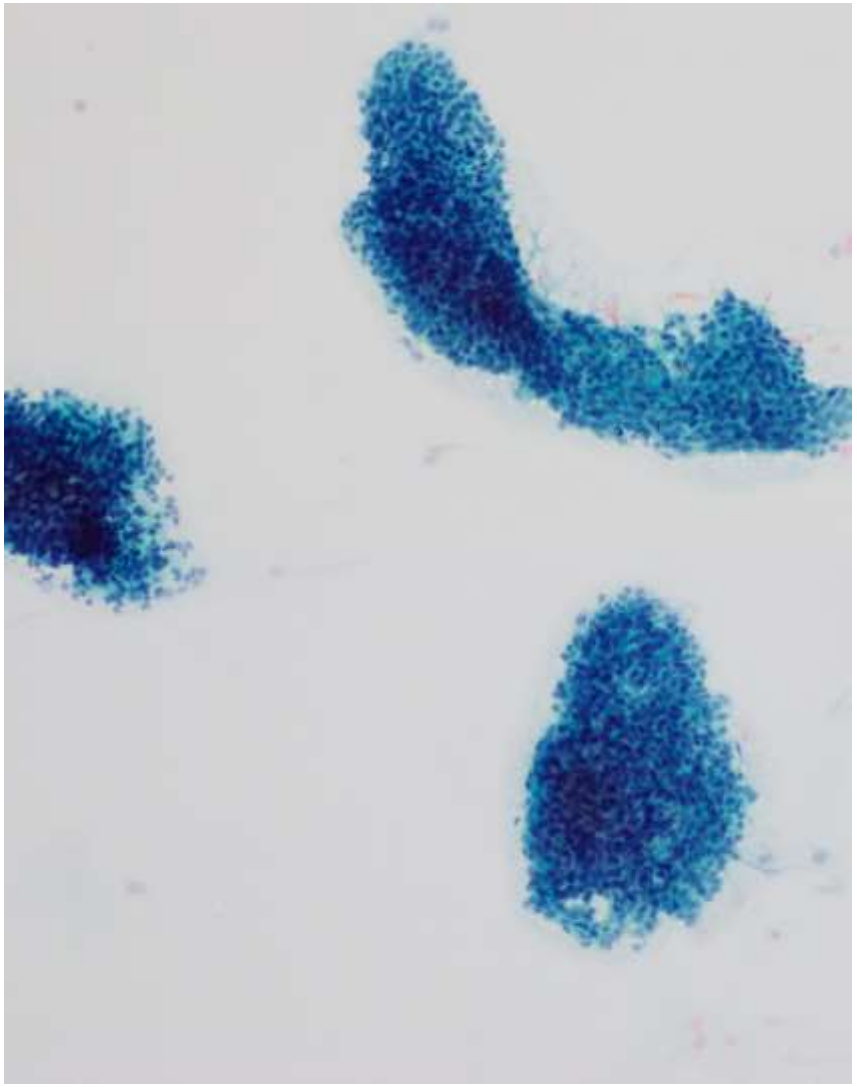
悪性リンパ腫



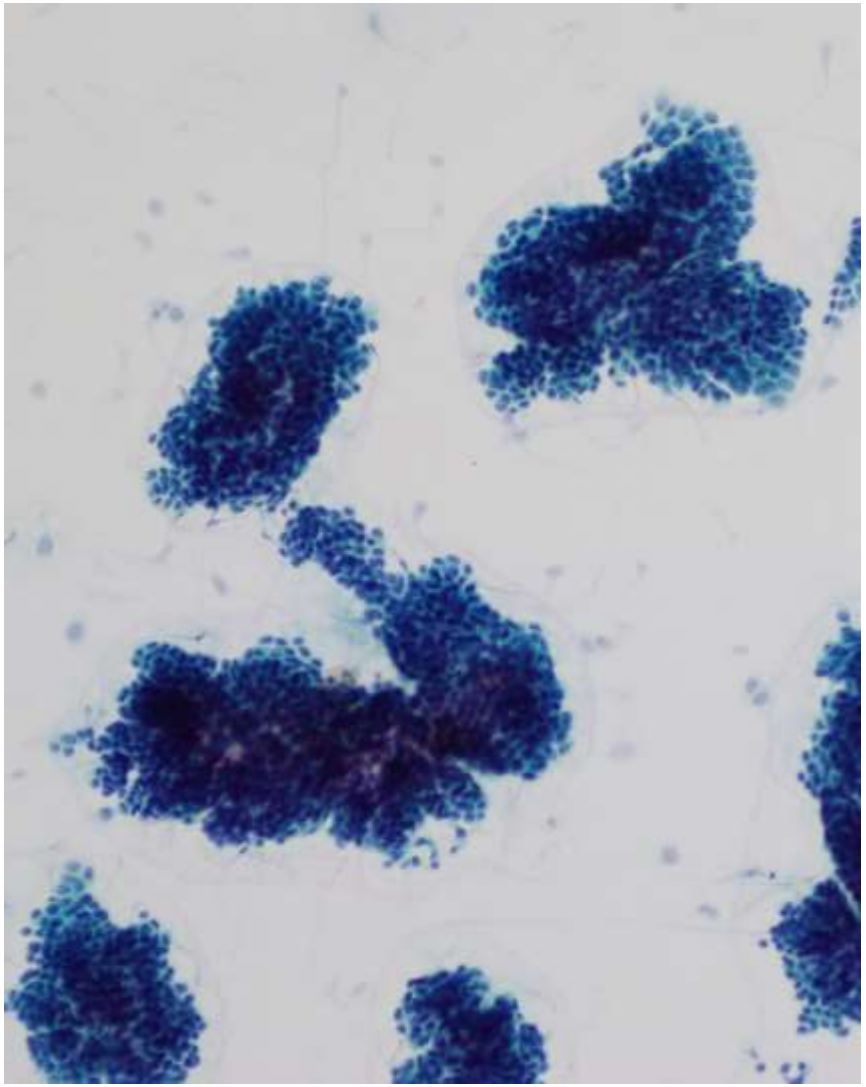


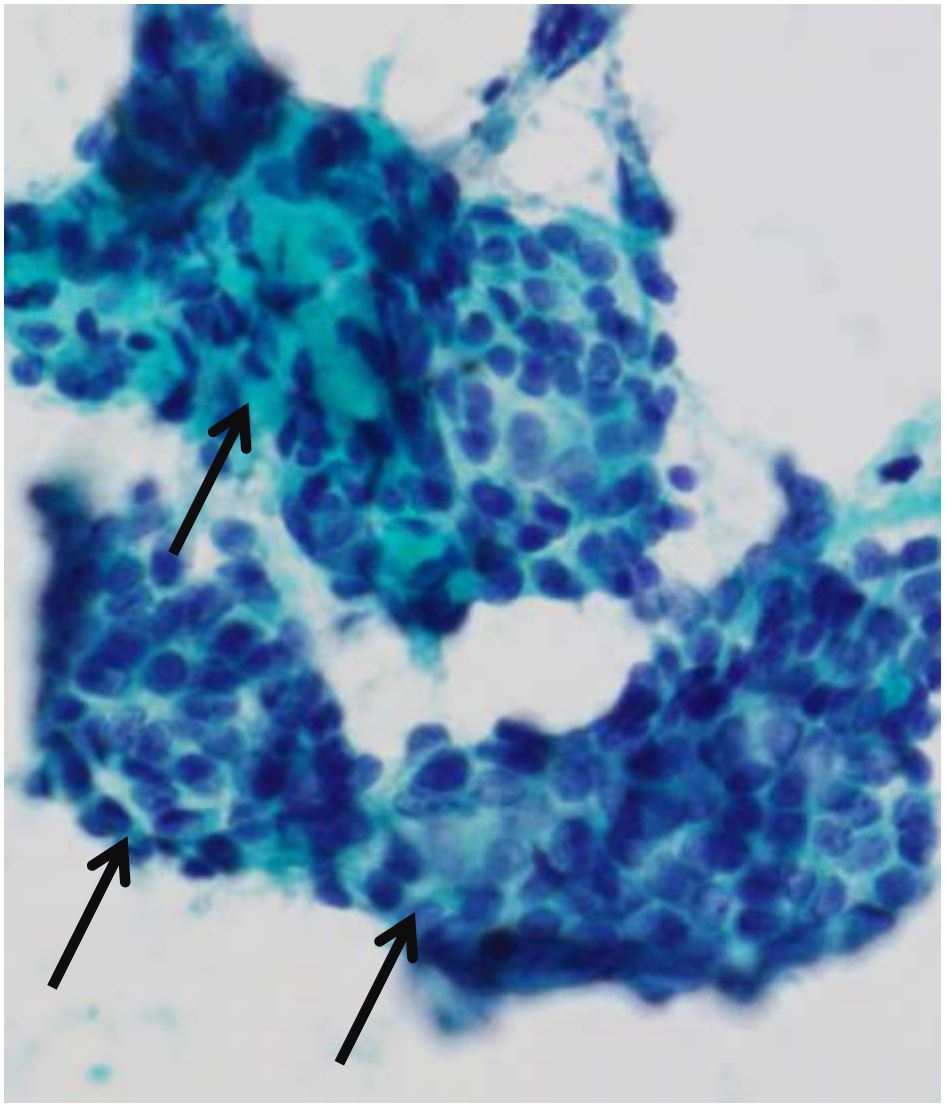
- 腫瘍細胞は孤立性に出現
- 小型リンパ球に比べ中型～大型の腫瘍細胞が単調に増生

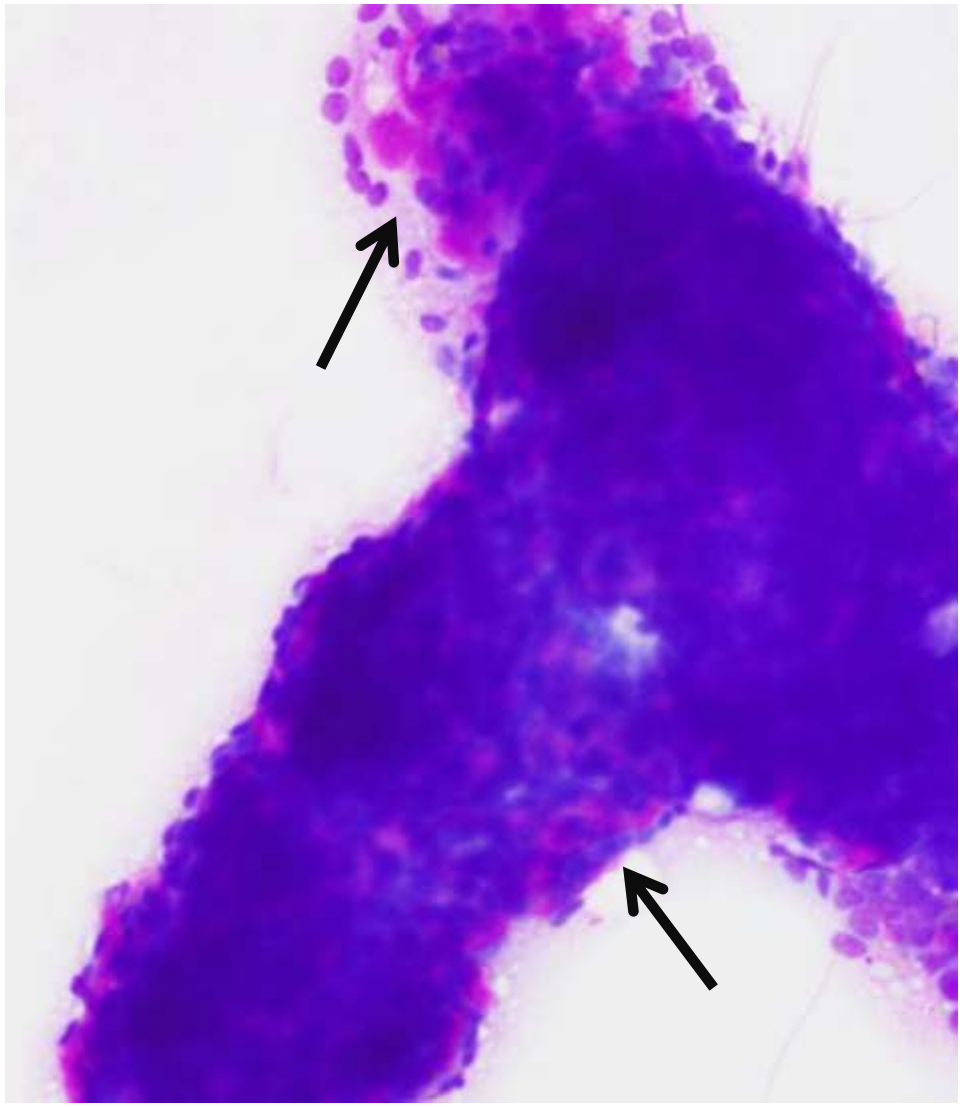
腺様嚢胞癌



乳頭腺管癌







リンパ節の細胞診

- リンパ節病変は非腫瘍性と腫瘍性に分けられ、腫瘍性病変はさらに原発性と転移性に分けられる。

- 診断にあたり年齢、部位、大きさ、単発性あるいは多発性等の臨床情報を知ることは有用であるが、その反面先入観を持つことにもなるため、虚心に細胞所見を読み取ることが大切である。